

## 総 説

# Place Attachmentの概念分析：看護への活用

## Concept Analysis of Place Attachment: Practical Use of Place Attachment in Nursing

川 本 美 香 (Mika Kawamoto)\*<sup>1</sup> 時 長 美 希 (Miki Tokinaga)\*<sup>1</sup>

### 抄 録

目的：Place Attachment概念について明らかにし、本概念の看護学での活用可能性を検討することである。

方法：Walker & Avantの概念分析の手法を用い、分析対象文献は、51文献（国内36件、国外14件、書籍1件）を選定、分析し、議論をとおして結論づけた。

結果：分析の結果、8つの属性【惹きつけられている感情】、【肝要な存在としての価値】、【構成員という心持ち】、【他者とあることへの志向】、【自分らしさとの接続感】、【生活に表れる親和】、【心の安らぎ】、【保護への願い】がみられた。

結論：本研究の概念分析の結果から、看護で活用することに向けた、Place Attachment概念の定義は、「体験をとおして人に意味づけられた空間である場所と人との情緒的な結びつきである。この結びつきは、惹きつけられている感情、肝要な存在としての価値、構成員という心持ち、心の安らぎ、保護への願い、という感情および認知として表現され、他者とあることへの志向、自分らしさとの接続感、生活に表れる親和、という人々の日常にある行動にも表れる。」と結論づけた。看護者が、健康につながる社会生活を生む地域づくり実践に際し、看護現象における人の場所との結びつきのあり様を理解する点で、看護実践および研究において有用な概念であると考えられた。

### Abstract

Objective: To clarify the concept of place attachment and examine its potential application in nursing.

Methods: Using Walker and Avant's approach to concept analysis, 51 pieces of writing were selected as the analytical target (36 domestic, 14 international, and one book), and a conclusion was reached through discussions.

Results: The result of the analysis identified eight attributes: the emotions that cause attachment; the value of having a vital existence; a member's mindset; the intention to be with others; the sense of connection with oneself; the affinity that is expressed in life; peace of mind; and the wish to be protected.

Conclusions: The definition of place attachment that resulted from concept analysis was used in nursing as follows: "It is an emotional and feeling connection between people and places that has been given significance through experience. This connection is expressed in the form of emotions and the recognition of the value of being a vital existence, a member's mindset, peace of mind, and the wish to be protected. This connection is also expressed in the daily behaviors of people, such as intention to be with others, sense of connection with oneself, and affinity that is expressed in life." It is considered to be a useful concept in nursing practice and studies in terms of understanding the characteristics of making connections between people and places in nursing, when nurses engage in community building, creating a social life connected with health.

キーワード：① Place Attachment ②概念分析 ③地域づくり ④公衆衛生看護学

---

\*<sup>1</sup> 高知県立大学看護学部

## I. は じ め に

わが国の高齢化は、世界のなかでも著しい速度で進展しており、高齢化から起こる社会現象にどう対応していくか、日本の動向は世界から着目（厚生労働省，2016）されている。この高齢化の進展から起こる社会現象に対応するために、我が国では地域包括ケアが推進され、その地域に応じた体制整備、運用が進められてきた。例えば、国内でも全国に比べ高齢化が進んでおり、地域振興5法の対象地域を多く有する自治体では、県民の誰もが住み慣れた地域で、安心して暮らし続けることのできるよう、県型の地域包括ケアシステムの構築を進めている（高知県，2018）。この流れのなかで、住民主体の介護予防活動、集いの場の運営、等、保健師の集団支援やケアシステムづくりをとおしてかかわる地域住民による活動は、多種多様である。保健師は、多様な活動に取り組む地域住民の集団を、看護活動の対象とする。保健師の看護活動には、地域特性に応じたまちづくりの推進（厚生労働省健康局，2013）を実現する地区活動が求められている。地域保健の分野では、健康増進を生む地域づくりについて、先進的に行う事例を示されている一方で、十分であるともいえない（曽根，近藤，藤内他，2016）と言われている。この事態の打開に向けて、地域の健康増進を進める公衆衛生看護学の分野からも、研究的な取り組みが必要であると考えた。

そこで保健師の看護活動において、ケアの対象であると同時に、ケアを創るパートナー（川本，時長，2017）でもある住民のなかで、主体的な地域活動に取り組む住民の、地域社会生活に着目した。地域愛着が高い人は、町内会活動や町づくり活動などの地域での活動に熱心である傾向（鈴木，藤井，2008b）にあり、コミュニティの一員であることに誇りを持つ（Newnham et al, 2008）ことが明らかにされていた。看護学分野では、佐伯ら（2018）は、地区活動のためのアセスメントで、人びとの意識と社会関係を捉える視点として、‘地区への愛着’をおいた。また、大森ら（2014）や酒井ら（2016）、滝澤ら（2018）や櫻井ら（2018）によって、‘地域への愛着’概念を定義し、活用した研究がすすめ

られ、看護実践へ活かす取り組みがなされている。このように、住民と地域の結びつきを探求し、看護を開発していく基盤づくりがされている。他分野に目を向けると、地域愛着は、Place Attachment概念から探求されており、研究が蓄積されている。そこで、人々をつなぐ要素のなかのひとつである、人々が生活している場所（Baum, 2002）に着目し、看護への活用に向けたPlace Attachmentの概念分析に取り組み、看護現象を探求することが必要であると考えた。このことは、健康増進を生む地域づくりへの看護研究および看護実践を充実させることへの糸口となると考えた。

以上より、本研究の目的は、Place Attachmentの概念について明らかにし、本概念での看護での活用可能性について検討をすることとした。

## II. 研 究 方 法

### 1. データ収集の手順と方法

Place Attachment概念を活用した国内の先行研究では、Place Attachment概念は複数の日本語に翻訳、使用されている。そこで、Place Attachmentが日本語でどのように訳され使用されているかを確認し、本概念分析での検索用語を決定した。具体的には次の手順で取り組んだ。

まず、国内文献について、データベースCiNii Articlesで、Place Attachmentを検索用語として、検索（検索日2018年9月8日検索）した。ここで得られた303件のうち、閲覧可能なアブストラクトでのPlace Attachmentの日本語訳を確認した。その結果、「地域への愛着」「地域愛着」「場所への愛着」「場所愛着」「場所愛」「トポフィリア」が確認されたため、この6つの用語を検索用語の候補とした。次に、6つの検索用語それぞれで文献を検索した。検索された文献のテーマとアブストラクトにPlace Attachmentという英語表記があるか、引用参考文献にPlace Attachmentを含んでいるかの2点を確認した。いずれかにPlace Attachmentを含んでいた場合、本概念分析で内容を確認する文献とした。国外文献は、Place Attachmentを検索用語とした。

以上の手順を踏まえ、本概念分析での検索用語は、「Place Attachment」「地域への愛着」「地

域愛着」「場所への愛着」「場所愛着」「場所愛」「トポフィリア」の7つに決定した。

使用したデータベースは、国内文献については「医学中央雑誌web版」「CiNii Articles」の2つのデータベース、国外文献については「CINAHL」「MEDLINE」「ProQuest」の3つを使用した。なお、これまでの概念の用法を明らかにするため、今回の検索では掲載年は規制していない。

これらをとおし、本概念分析における、分析対象文献を次のとおり収集した。国内文献については、「医学中央雑誌web版」で全49件（地域への愛着35件、地域愛着8件、場所への愛着1件、場所愛着0件、場所愛3件、トポフィリア2件）、「CiNii Articles」137件（地域への愛着122件、地域愛着80件、場所への愛着29件、場所愛着12件、場所愛26件、トポフィリア24件）が検索された。そして、重複文献を整理し、定義や内容が記述される文献36件を分析対象とした。国外文献については英語で書かれた論文に限定し、「CINAHL」および「MEDLINE」で209件、「ProQuest」で1190件のテーマとアブストラクト（確認できるもののみ）で内容を確認し、入手可能でPlace Attachmentの内容について記述されていた27文献を選択した。そして、27文献の全文の内容を確認し、14文献を分析対象とした。関連書籍については、先行研究で引用されていること、概念定義を示していることの2点をふまえて、Place Attachment概念について概観することが可能な洋書1件を選択した。

また、これとは別にWalker & Avantの概念分析の手法（中木ら，2008; Walker & Avant, 2005/2008）を用いた概念分析のデータ収集方法を参考（Swan et al, 2017）に、先行研究の引用参考文献のなかで多く引用されているものは、二次的情報収集源として拡大して収集した。ただし、ここで選択した文献は概念の使われ方の理解に活用した。つまり、先行要件、属性、帰結の分析対象にはしていない。

以上を踏まえ、最終的に本概念分析の対象文献は、51文献（国内36件、国外14件、書籍1件）とした。

## 2. 分析方法

本概念の、看護学における活用を見据え、Place Attachment概念の基本となる要素と構造を明らかにするために、Walker & Avantの概念分析の手法（中木ら，2008; Walker & Avant, 2005/2008）を用いた。今回分析対象としたPlace Attachment概念は、複雑で多面的な概念である（Altman, Low 1992）とされる。このことは、研究者が研究目的に応じて概念を多面的に用いることができる反面、概念活用における前提を明瞭にすることが求められる。Walker & Avantの概念分析の手法では、属性に含まれる特徴を繰り返し検討するため、属性に含まれる要素同士の弁別を可能にすることができると考え、看護への活用に向けたPlace Attachment概念の概念分析の分析手法として選択した。

なお、概念分析にあたっての信頼性、妥当性の確保に向け、看護学の研究者との議論をふまえて分析プロセスと結果を見直し、暫定的な結果を見出した。その後、この暫定的な結果を用い、地域看護学の研究者と、議論を繰り返し、最終的な結果を結論づけた。

## Ⅲ. 結 果

まず、概念の用法について記述し、次にPlace Attachmentの属性および先行要件、帰結の内容を記述した。また、関連概念を明らかにした。

属性、先行要件、帰結の内容は、それぞれのカテゴリを【 】、サブカテゴリを〈 〉、で示す。

### 1. 概念の用法

対象文献において、用法が確認できた学問領域と定義を整理した。

#### 1) 国外での用法

国外では、主に環境心理学、文化人類学、建築学、医学、看護学での活用がみられた。Place Attachmentは、People（Riley, 1992; Hidalgo et al, 2001）やPerson（Rubinstein et al, 1992; Fan et al, 2014）とPlaceとのbondやlink（Hidalgo, 2001）して表現されており、Place Attachmentには、人生の経験や歩んできた軌跡が関わって（Rubinstein et al, 1992）いた。絆や結びつきを持つ人は、

individualやgroup (Scannell, Gifford, 2010; Altman, Low 1992)があった。Low & Altman (1992)は、Place Attachmentは、特定の空間や土地に文化的、感情的な意味を与えるもので、人々が特定の場所との間に形成する関係であると述べている。心理学領域では、Place Attachmentは、感情的側面、認知的側面、行動的側面から明らかにすることができる (Scannell, Gifford, 2010) とされていた。また、看護学では、ナースによる患者の慣れ親しんだ環境への関心が患者へのケアに活かされることの必要性 (Devik et al, 2015) を述べていた。

## 2) 国内での用法

国内では、主に医学、社会学、心理学、人間発達学、土木・建築学、教育学の分野で使用されていた。国内で用いられていた定義は、Hidalgo (Hidalgo, 2001) やLow & Altman (1992) および引地ら (2009) によるものを用いているものが多く、各分野で研究目的に応じてアレンジして、使用されていた。土木学分野ではコミュニティや地域への態度、住民意識は含めず、人間と場所との感情的なつながり (鈴木, 藤井, 2008c) をとりあげ、心理学分野で活用される定義をもとに活用されている場合もあった。

## 2. 属 性

Place Attachmentの属性は、【惹きつけられている感情】、【肝要な存在としての価値】、【構成員という心持ち】、【他者とあることへの志向】、【自分らしさとの接続感】、【生活に表れる親和】、【心の安らぎ】、【保護への願い】の8つであった。以下にそれぞれについて述べる。

### 1) 惹きつけられている感情

これは、好ましい印象を持った感情を表す属性である。＜親しみがあり好き＞、＜ここが気に入りがいい＞、＜かかわりから生まれるうれしさ＞、＜ここに住み続けたい＞が含まれていた。＜親しみがあり好き＞では、個人の嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する評価の程度 (鈴木, 藤井, 2008c, 鈴木, 中井, 藤井, 2010) を示していた。＜ここが気に入りがいい＞では、雰囲気や土地柄 (菅, 古川, 舟橋他, 2018)、子育て

での環境としては良い方だ (大重, 顧, 石垣他, 2016) として、気に入っている対象とともに感情を示していた。＜かかわりから生まれるうれしさ＞では、自分が必要とされるうれしさ (渡辺, 2014) のように個人の役割から得られる感情と、わたしは、自分の学校がほめられると、とてもうれしい (奥野, 藤本, 鎌倉他, 2008) のように、自分が所属する集団をとおした感情の2つを示していた。また、＜ここに住み続けたい＞ (萩原, 藤井, 2005; 引地, 青木, 大淵, 2009; 大重, 顧, 石垣他, 2016; 吉村, 北山, 2016) では、未来を見据えた願望を含む感情を示していた。

### 2) 肝要な存在としての価値

これは、人生における必要性や重要性の程度の高さを表す属性である。＜この地域は私にとって大切＞、＜ここでなければならぬ＞、＜なくなってしまうと悲しい＞が含まれていた。＜この地域は私にとって大切＞では、大切に思う対象を、特定の市町村 (菅ら, 2018)、地域 (萩原, 藤井, 2005; 吉村, 北山, 2016)、地域の人々 (引地, 青木, 大淵, 2009) と示していた。＜ここでなければならぬ＞では、そこにしかないものがある (川村, 谷口, 2013) のように、その場所にある対象物を示すものと、土地自体 (引地ら, 2009) を示すものがみられた。＜なくなってしまうと悲しい＞ (菅, 古川, 舟橋他, 2018) では、喪失した場合の感情を示していた。

### 3) 構成員という心持ち

これは、この集団を成す一員であるという認識と行動を表す属性である。＜ここは私のまちだという気がする＞、＜地域の一員である＞が含まれていた。＜ここは私のまちだという気がする＞では、自分の町だという感じがする (萩原, 藤井, 2005; 菅, 古川, 舟橋他, 2018) や、私はここに根をはる (Devik, Hellzen, Enmarker, 2015) のように、一員であると感じる程度を示していた。＜地域の一員である＞では、主体的な健康づくり活動 (高橋, 末永, 栗本他, 2010) や環境配慮行動 (野波, 加藤, 2009) のように、集団への帰属意識に伴う社会的な行動を示していた。

## 4) 他者とあることへの志向

これは、人の内面で沸き起こる他者と自分とのまとまり感を表す属性である。＜人に役立つ＞、＜人と助け合う＞、＜皆でのまとまりがある＞が含まれていた。＜人に役立つ＞では、声かけなど地域の役に立つ（渡辺，2014）のように、人が地域や人々に向けて抱く意思を示していた。＜人と助け合う＞では、みんなで助けあっています（奥野，藤本，鎌倉他，2008）のように、人と作用しあう状態を示していた。＜皆でのまとまりがある＞では、この地域のまとまりは良い方だ（大重，顧，石垣他，2016）のように、一団としてある様への肯定的な評価を示していた。

## 5) 自分らしさとの接続感

これは、生きるなかでかかわってきた場所での体験が内在化し、今の自分を形成するものとして位置づいたことを表す属性である。＜ここが私のなかに生き続ける＞、＜自己を強化するもの＞が含まれていた。＜ここが私のなかに生き続ける＞では、自分のなかで過去を存続させ（Rubinstein et al, 1992）たり、思い出がある（川村，谷口，2013）のように、場所の人の内面への位置づき方を示していた。そして、＜自己を強化するもの＞では、過去の重要な場所を人のなかに存続させ、アイデンティティを育む（Rubinstein et al, 1992）ことを示していた。

## 6) 生活に表れる親和

これは、日常を過ごすなかでの慣れ親しみを表す属性である。＜顔の見える関係がある＞、＜社会的・地理的な親しみ＞が含まれていた。＜顔の見える関係がある＞では、地域のお年寄りの顔がみえる（渡辺，2014）や、わたしの組にはわたしのそんけいする友達がいます（奥野，藤本，鎌倉他，2008）のように、具体的な他者が心に浮かぶ様を示していた。＜社会的・地理的な親しみ＞では、その土地や土地に住む人々に対して近い親しさを感じることが自信として表れ（Newnham et al, 2008）、のように、土地に触れ、人に触れることで感じられる近接さを示していた。

## 7) 心の安らぎ

これは、心の平穏さを表す属性である。＜安らぐ平和な気持ち＞、＜ここでのおさまりの良さ＞が含まれていた。＜安らぐ平和な気持ち＞では、公園に対してコミュニティのメンバーが心の安らぎを見つけ、身体活動や社会化を促進およびストレスを低減し、自らに平和をもたらす（Estrella M. et al, 2017）のように、場所にもたらされる平穏さを示していた。＜ここでの納まりの良さ＞では、自分の居場所がある気がする（萩原，藤井，2005；菅，古川，舟橋他，2018）、自分が正しい場所にいる、はまる場所、自分がぴったり合う場所（Newnham et al, 2008）のように、その場所に居ることの違和感のなさを示していた。

## 8) 保護への願い

これは、守り続けてほしいという願いを表す属性である。＜いつまでも変わってほしくないものがある＞、＜ここを守りたい＞、＜住みやすい地域であってほしい＞が含まれていた。＜いつまでも変わってほしくないものがある＞では、持続願望（鈴木，藤井，2008c）のように、対象に変化を求めない継続性を示していた。＜ここを守りたい＞では、保護したいと思うようになる（Scannell, Gifford, 2011）のように、対象への養護の願望を示していた。＜住みやすい地域であってほしい＞（高橋，末永，栗本他，2010）では、居住地に対する日々の暮らしやすさへの願いを示していた。

## 3. 先行要件と帰結

Place Attachmentの先行要件4つと帰結4つについて、【 】で示す。

## 1) 先行要件

先行要件は、【日常的な風土接触】、【印象に残る経験】、【引き寄せられるものがある空間】、【意味づけられた空間】の4つであった。

【日常的な風土接触】は、人と空気・自然・地域の人々との触れ合いを示す。風土との接触度と地域愛着（主に選好）との相関傾向（鈴木，藤井，2008c）、地域の人々との交流があること（鈴木，藤井，2008a, c）、来訪地の住民との交

流があること（谷口，今井，原他，2012）、近隣住民との日常的な接触度の高さ（Brown et al, 2003）がみられた。

【印象に残る経験】は、人が実際に見たり聞いたり取り組んだことで、記憶に残っている、もしくは忘れられない事柄を示す。特定の生きた経験や記憶に富む公共の場所（Hees, 2017）、そこにある水とのレクリエーション体験（Budruk et al, 2008）、愛着対象となる場所の地理的近さによる密接な関連（野波，加藤，2009）がみられた。

【引き寄せられるものがある空間】は、触れたことのある構造物や人の所有物などが存在する物理的空間を示す。家具やその人の記念品を置いた個人のスペースを確保することで、居室に対し個別的で親しみある感情を持つ場所になった（Falk et al, 2013）、特定の場所を思い起こさせる美しいもの（Estrella M. et al, 2017）がみられた。

【意味づけられた空間】は、その空間での体験や社会的相互作用によって人に根付いた空間を示す。人生の軌跡を忘れない長い時間の過程で呼び起こされる場所（Rubinstein et al, 1992）、過去にかかわり一旦消失した場所の記憶が、再度呼び起こされる（Riley, 1992）、空間と共にすごした時間を通して人が意味を割り当てた空間（Altman, Low, 1992）がみられた。また、空間に意味をつけるようになり、結果としてアイデンティティのなかで場所として位置づいていく（Rubinstein et al, 1992）がみられた。

## 2) 帰 結

帰結は、【健康な日常生活】、【自己の安定化】、【安心できる環境】、【閉じられたコミュニティ】の4つであった。

【健康な日常生活】は、普段にあって心身および社会的に良好な状態を感じられることを示す。＜心身の健康の保持増進＞、＜健康と幸せを感じる日常＞が含まれていた。＜心身の健康の保持増進＞では、居住環境の美観が高齢者の抑うつ改善因子になる（角田，桂，星野他，2015）、子どもが好きな場所への訪問は、心の問題が改善する（Korpela et al, 2002）がみられた。＜健康と幸せを感じる日常＞では、健康関

連QOLの獲得（Wiles J.L. et al, 2017）、生活における満足感（Oswald Frank et al, 2011; 角田，桂，星野他，2015）がみられた。特に、家庭、近所、地域社会、自然、屋外への前向きな感情は、健康関連QOLと関連を持っている（Wiles J.L. et al, 2017）とされていた。高齢者においては、帰属意識が、健康と幸福に関連（Oswald F. et al, 2011）としていた。

【自己の安定化】は、私を形作るものがある私自身の揺らぎの無さを示す。高齢者が前向きな自己感覚を持つ（Rubinstein et al, 1992）、コミュニティメンバーであることへの誇り（Estrella M. et al, 2017）がみられた。

【安心できる環境】は、物理的・社会的環境への気がかりの無さを示す。＜治安の良さ＞、＜社会資源への信頼＞、＜日常生活で困らない人付き合い＞、＜人が助け合う仕組み＞が含まれていた。＜治安の良さ＞では、麻薬等の犯罪の恐れが少ないことが関連（Brown et al, 2003）していた。＜社会資源への信頼＞では、行政を信頼する傾向（鈴木，藤井，2008b；藤川，1994）がみられた。＜日常生活で困らない人付き合い＞では、顔を合わせると挨拶をする、幼児がお留守をするときに頼める人数が多くなる（大重，顧，石垣他，2016）、助け合いながら生活していきたい（高橋，末永，栗本他，2010）がみられた。＜人が助け合う仕組み＞では、ボランティアネットワーク（渡辺，2014）や、子どもにとってもみんなが私に親切です（奥野，藤本，鎌倉他，2008）がみられた。

【閉じられたコミュニティ】は、閉鎖性という人の集まり方が持っている特徴を示す。社会的少数を排除する可能性がある（Rubinstein et al, 1992）、コミュニティの外部の人々や活動とのつながりがしだいに薄れてきた（Ayalon et al, 2016）がみられた。

## 4. 関連概念

Place Attachmentに関連すると考えられる概念4つを検討した。

### 1) 関連概念との相違性

関連概念として、先行した概念分析（Altman, Low, 1992）および、場所と個人の情動的なつながり（大谷，2013）や住区への愛着に関する

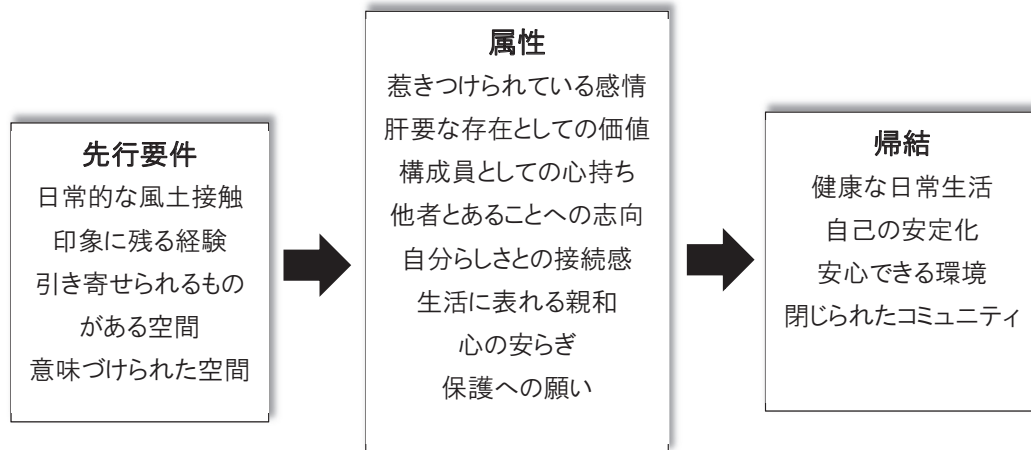


図1 Place Attachment概念：概念分析の結果

文献研究（園田，2002）、また概念定義を示していた国外文献より、‘Sense of Place’、‘Place-Identity’、‘Place Dependence’、の3つの概念に着目した。

Sense of Place は、人間と空間設定との間の関係を記述する、他の概念を包含する包括的な概念である（Jorgensen et al, 2001）とされる。

Place Identity（Proshansky, 1983）は、自己を定義する自己次元を含んだ概念であり、場所と関連する考え、信念、好み、感情、価値観、行動傾向および技術のパターンで表現される、物理的環境に関する個人のアイデンティティであるとされる。園田（2002）は、このProshanskyら（1983）のPlace Identityについて、自己アイデンティティの下部構造であり、個々人が生きている物理的世界に関する認知であるとまとめている。日本語では‘場所アイデンティティ’（園田，2002；大谷，2013）と訳され大谷（2013）は、場所アイデンティティを、ある場所が個人の自己を定義し、自己概念を維持する力を持つとき、その絆を場所アイデンティティと呼ぶ、としている。

Place Dependenceは、自分自身と特定の場所との間の関連の強さであると定義（Stokols et al, 1981）されている。

また、これらの3つの概念とPlace Attachmentは、人と場所との包括的な心理的結びつきを扱う操作的概念としてのSOPモデル（Jorgensen et al, 2001）として、国内の研究でも活用（城月，大槻，石橋，2014）されている。

以上より、Place Attachmentは、Sense of Placeを構成するものであると捉えられ、Place Identity、Place Dependenceと同様の次元に位置する概念であると判断した。一方では、Place Attachmentは、これらの概念と相互に関連し、分離することが不可能な側面を含んだ統合的な概念である（Altman, Low, 1992）ともされる。

以上より、Sense of Place, Place Identity, Place Dependenceは、Place Attachmentの関連概念であると位置づく判断した。

## 2) 日本の看護学における近接概念

日本の看護学で発展している‘地域への愛着’であるとした。本概念は、公衆衛生看護で用いられている概念であり、大森ら（2014）の提唱する‘地域への愛着’、滝澤ら（2018）や櫻井ら（2018）の提唱する‘地域への愛着’がある。

まず、大森ら（2014）は公衆衛生看護実践の充実に向け、‘地域への愛着’概念を取り入れることを目的に、地域への愛着概念の定義を「日常生活圏における他者との共有経験によって形成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向する心構えである」としている。また、滝澤ら（2018）は、地域への愛着を「自分が住んでいる地域で暮らす生活と人とのつながりとの相互作用によって育まれていく、自分にとってその地域やそこに住む人々が大切で特別だと思う感情や思考」と定義していた。また、これに伴い尺度開発が行われ、看護場面での実用化

に取り組まれている概念である。

Place Attachment概念との近接点は、地域および人々の社会的関係との結びつきが含まれ、他者との経験から形成されるという点であると考えた。

#### IV. 考 察

##### 1. Place Attachment概念の定義と特性について

本研究の概念分析の結果から、Place Attachment概念の定義を次のとおり結論づけた。Place Attachmentは、「体験をとおして人に意味づけられた空間である場所と人との情緒的な結びつきである。この結びつきは、惹きつけられている感情、肝要な存在としての価値、構成員という心持ち、心の安らぎ、保護への願い、という感情および認知として表れ、他者とあることへの志向、自分らしさとの接続感、生活に表れる親和、という人々の日常にある行動にも表れる。」とした。

まず、Place Attachment概念の特性について述べる。Ⅲ. 1で、本研究結果での概念の用法の整理した。その結果から、Place Attachment概念の使われ方から本概念の特性を、5点述べる。第1に、Place Attachmentは、その定義において、ある特定の空間に対する結びつきを、「絆」「きずな」や「つながり」「特別な場所」と表現されていた。第2に、Place Attachmentは、個人および集団に表れるものであった。第3に、個人と場所の情緒的なつながりとして、感情的側面、認知的側面、行動的側面に表れていた。第4に、Placeへの態度や意識を含めた概念として使われる場合や、感情的つながりのみを表すものとして使用される等、研究者が研究目的に応じて活用の方を決定していた。第5に、研究者の主題によって、場所や地理的エリアの側面が強調される場合と、人々の社会的関係が強調される場合があった、ということである。

また、先行要件の分析より、Place Attachment概念は、人が生きてきたなかでの経験が、その発生にかかわるという結果が得られた。物理的空間は意味を与えられて場所になる（大谷, 2013）ことから、Place Attachmentは、過去から

のつながりとして現在の感情、認知、行動として現れると考える。したがって、今回の概念分析の結果である8つの属性は、先行要件4つにみられるPlaceをとおした、これまでの人生での体験を含んだものとなると言える。Low (Altman, Low, 1992) は、過去、現在、未来という直線的または周期的な時間との関連を述べていた。このことは、今回の分析結果と同様の見解であったと言える。以上をふまえると、属性は、時間的経過や人々の経験の仕方を含めて表現していくことがPlace Attachmentの解明に欠かせないと考ええる。

##### 2. Place Attachment概念の看護での活用について

概念分析の結果、その帰結から、Place Attachmentは、健康な日常生活、自己の安定化、安心できる環境、につながる概念であることが明らかとなった。健康増進を生む地域づくりへの看護研究および看護実践への活用に向け、保健師の地区活動の手法であるグループ支援に焦点をあてて考察する。グループ支援の対象となる、地域住民は、自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけについて、独居高齢者の参加を支える存在として、メンバーが独居高齢者を支えてくれることや、活動場所での自分の定位置がある（安孫子, 原田, 2017）ことが明らかにされている。また、高齢男性の自主的な地域活動への継続参加の要因として、地域の一員としての自己の獲得が抽出（小野寺, 齋藤, 2008）されている。このことは、今回の概念分析の結果の属性である【他者とあることへの志向】や【生活に表れる親和】が支えられているといえ、Place Attachment概念を活用した探求によって、地域に応じたグループ支援の実現を支えると考ええる。高齢者が継続した地域社会生活を送り、自らの健康を維持するには、新しく獲得した地域でのその人の場所でのPlace Attachmentに気づき、それを支える看護実践が必要となる。Place Attachmentを、人の人生での時間的経験と経験の仕方によって、位置づいたものであることをふまえると、人々が生きてきた経験をふまえた看護実践が可能となると考える。以上より、Place Attachment概念は、地域で

個人を理解することや、グループ支援、またそれをとおした地域のシステムづくりの探求にまで活用できる概念であると考え。地域看護学は、「地域看護学は、人々の生活の質の向上とそれを支える健康で安全な地域社会の構築に寄与することを探求する学問である。」（一般社団法人日本地域看護学会，2019）ことを考えると、Place Attachmentに焦点を当てた研究は、学問領域へも貢献できると考える。

Place Attachment概念の看護学での活用を検討するにあたっては、2点留意点があると考え。まずPlaceの範囲を明確にすること、と、Place Attachment概念の系統を明確にしたうえででの活用、である。

まず、Placeの範囲を明確にすること、について述べる。「Attachmentという言葉は感情を強調し、Placeという言葉は、人々が感情的、文化的にAttachmentを向ける環境設定に焦点をあてている。しかし、Placeという言葉が何を意味するのかという問題が生じる」（Altman et al, 1992）と言われる。また、これまでの国内外の先行研究でも、Attachmentの対象としてどのようなPlaceを設定するか、各研究者が明確にしていた。これをふまえると、看護学での活用においても、研究主題に応じて先行研究を活用したPlaceの設定への検討が必要であると考え。

次に、Place Attachment概念の系統を明確にしたうえででの活用、について述べる。Place Attachmentの用いられ方は、Ⅲ. 1で整理したように、研究者や学問分野、研究目的により、活用において系統が様々にみられ、一部、Bowlbyの愛着理論の流れをくむもの（園田，2002）がみられた。看護現象の探求においても、Place Attachment概念の系統のどこに身を置き、研究を進めるかを決定することが、探求を進めるにあたって必要であると考え。Bowlbyの愛着理論は、愛着を扱うにあたって、日本の看護学分野でも活用（中島，2001；中島，2002）されてきた。Place Attachment概念の看護での活用は、研究および実践の発展を考えると、看護学で長く活用されてきた愛着理論の流れを含めて検討することが必要であると考えた。

本研究の限界は、選択した文献からの分析結果であり、選択した文献の研究目的によって指

標が様々であり、経験的指示対象を整理できなかった点にある。今後も、看護現象への適用を検討していくにあたり、このことについて検討することが必要である。

## V. 結 論

看護学における活用を見据えた、Place Attachment概念の基本となる要素と構造は、8つの属性【惹きつけられている感情】、【肝要な存在としての価値】、【構成員という心持ち】、【他者とあることへの志向】、【自分らしさとの接続感】、【生活に表れる親和】、【心の安らぎ】、【保護への願い】、4つの先行要件、【日常的な風土接触】、【印象に残る経験】、【引き寄せられるものがある空間】、【意味づけられた空間】、4つの帰結、【健康な日常生活】、【自己の安定化】、【安心できる環境】、【閉じられたコミュニティ】から形成されると結論づけた。本概念を看護学で活用するにあたっては、Placeの範囲の明確化と、Place Attachment概念の源流の位置付けの明確化を留意することで、有用となると考える。

謝 辞：本研究へのご指導いただきました皆様に心より感謝いたします。本研究は、JSPS科研費JP19K11254の助成を受けたものである。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

著者資格：MKは、探求する看護現象を含めた本研究の着想、研究方法の選択、データ収集、データ分析、文献管理、論文作成まで主として行った。MTは、探求する看護現象を含めた概念への着目、データ収集および分析、論文作成について批判的評価および助言、継続的な分析の遂行、洗練化および論文作成に関わった。

## <引用参考文献>

安孫子尚子，原田小夜（2017）：自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ，聖泉看護学研究，6，9-18.

赤塚永貴，有本梓，田高悦子，他（2016）：都市部地域在住高齢者の主観的健康感に関連する

- 要因の性差に関する比較, 日本地域看護学会誌, 19(2), 12-21.
- Altman I., Low S. M. (1992): CHAPTER1 Place Attachment A Conceptual Inquiry, 1-12, Springer Science & Business Media.
- Ayalon L., Greed O. (2016): A typology of new residents' adjustment to continuing care retirement communities, *The Gerontologist*, 56 (4), 641-650.
- Baum F. (2002): Measuring effectiveness in community-based health promotion Quality, evidence and effectiveness in health promotion (80-102), Routledge.
- Brown B., Perkins D. D., Brown G. (2003): Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, *Journal of environmental psychology*, 23(3), 259-271.
- Budruk M., Stanis S. A. W., Schneider I. E., et al. (2008): Crowding and experience-use history: A study of the moderating effect of place attachment among water-based recreationists, *Environmental Management*, 41(4), 528-537.
- Devik S. A., Hellzen O., Enmarker I. (2015): "Picking up the pieces" - Meanings of receiving home nursing care when being old and living with advanced cancer in a rural area, *Int J Qual Stud Health Well-being*, 10, 28382.
- Estrella M. L., Kelley M. A. (2017): Exploring the meanings of place attachment among civically engaged Puerto Rican youth, *Journal of community practice*, 25(3-4), 408-431.
- Falk H., Wijk H., Persson L. O., et al. (2013): A sense of home in residential care, *Scand J Caring Sci*, 27(4), 999-1009.
- Fan J., Qiu H.-L. (2014): Examining the effects of tourist resort image on place attachment: A case of Zhejiang, China, *Public Personnel Management*, 43(3), 340-354.
- 藤川賢 (1994): VI地域への愛着と環境意識: 都民の水環境意識調査報告その6, 総合都市研究(54), 75-87.
- 船見高根. ジオパーク活動がもたらす地域愛着に関する研究: 持続可能な地域社会の創造に向けて. 21世紀社会デザイン研究: Rikkyo journal of social design studies 2016; 15: 149-161.
- 萩原剛, 藤井聡 (2005): 交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析, 土木計画学研究, 講演集, 32(5).
- Hees S.V., Hoetman K., Jansen M., Ruwaard D (2017): Photovoicing the Neighbourhood: Understanding the Situated Meaning of Intangible Places for Ageing-In-Place, *Health & Place* 48: 11-19.
- Hidalgo M. C., Hernández B. (2001): Place Attachment: Conceptual and Empirical Questions, *Journal of environmental psychology*, 21(3), 273-281.
- 引地博之, 青木俊明, 大渕憲一 (2009): 地域に対する愛着の形成機構 - 物理的環境と社会的環境の影響 -, 土木学会論文集D, 65(2), 101-110.
- 一般社団法人日本地域看護学会, 地域看護学の再定義 (最終閲覧日: 2020年1月10日) [http://jachn.umin.jp/ckango\\_saiteigi.html](http://jachn.umin.jp/ckango_saiteigi.html)
- Jorgensen B.S., Steadman R.C. (2001): Sense of place as an attitude: Lakeshore owners attitudes toward their properties, *Journal of Environmental Psychology*, 21, 233-248
- 川本美香, 時長美希 (2017): 生活習慣病の予防を目的とした保健指導における保健師と対象者の協働的パートナーシップ, 高知女子大学看護学会誌, 43(1), 91-101.
- 川村竜之介, 谷口綾子 (2013): まちなかの居場所が生活の質, 地域への意識に与える影響に関する研究, 土木学会論文集D3 (土木計画学), 69(5), I\_335-I\_344.
- 数井みゆき, 遠藤利彦 (2005): アタッチメント: 生涯にわたる絆, 京都: ミネルヴァ書房.
- 城月雅大, 大槻知史, 石橋健一 (2014): 住民の「場所感覚」が都市の居住評価に与える影響に関する実証研究: コンパクトシティ政策に対する「まちづくり心理学」的視点, 名古屋外国語大学現代国際学部紀要 (10), 113-126.
- Korpela K., Kyttä M., Hartig T. (2002): Restorative experience, self-regulation, and children's place preferences, *Journal of environmental psychology*, 22(4), 387-398.
- 厚生労働省 (2016): 平成28年度 厚生労働白書—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える

- 厚生労働省健康局 (2013. 4) : 地域における保健師の保健活動について.  
[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00tb9310 & dataType=1 & pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb9310 & dataType=1 & pageNo=1)
- 高知県 (2018) : 日本一の健康長寿県構想県民の誰もが住み慣れた地域で、安心して暮らし続けられるために第3期Ver.3.
- 窪田愛実, 羽鳥剛史 (2015) : 地域の物語との協和性認知と住民協働事業への参画に関する研究, 土木学会論文集D3 (土木計画学), 71(5), I\_359-I\_366.
- 中島登美子 (2001) : 母親の愛着尺度日本版の信頼性, 妥当性の検討, 日本看護科学会誌, 21(1), 1-8.
- 中島登美子 (2002) : 母親の愛着質問紙 (MAQ) の信頼性, 妥当性の検討, 小児保健研究, 61(5), 656-660.
- Newnham K., Boyd C., Newnham K., et al. (2008) : Experience of place for adolescents in rural Australia, Rural Social Work and Community Practice, 13(1), 15.
- 野波寛, 加藤潤三 (2009) : コミュニティ・アイデンティティとトポフィリアが環境配慮行動に及ぼす効果, 心理学研究, 80(1), 25-32.
- 奥野誠一, 藤本昌樹, 鎌倉利光, 他 (2008) : 小学生の向社会的行動と学校愛着および学級愛着との関連, 小児保健研究, 67(3), 518-524.
- 小野寺紘平, 齋藤美華 (2008) : 高齢男性の介護予防事業への参加のきっかけと自主的な地域活動への継続参加の要因に関する研究, 東北大学医学部保健学科紀要, 17(2), 107-116.
- 大森純子, 三森寧子, 小林真朝, 他 (2014) : 公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析, 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1), 40-48.
- 大重育美, 顧艶紅, 石垣恭子, 他 (2016) : 離島における1歳6か月健診児をもつ保護者とその祖父母の育児不安に関する実態調査, 小児保健研究=The journal of child health, 75(5), 594-601.
- 大谷華 (2013) : 場所と個人の情動的なつながり: 場所愛着, 場所アイデンティティ, 場所感覚, 環境心理学研究, 1(1), 58-66.
- Oswald F., Jopp D., Rott C., et al. (2011) : Is aging in place a resource for or risk to life satisfaction?, The Gerontologist, 51(2), 238-250.
- Proshansky H. M. (1978): The city and self-identity, Environment and behavior, 10(2), 147-169.
- Proshansky H. M., Fabian A. K., Kaminoff R. (1983): Place-identity: Physical world socialization of the self, Journal of environmental psychology.
- Riley R.B. (1992): CHAPTER2 Attachment to the Ordinary Landscape, 13-35, Springer Science & Business Media.
- Rubinstein R.S., Parmelee P.A. (1992): CHAPTER7 Attachment To Place and the Representation of the Life Course by the Elderly, 139-163, Springer Science & Business Media.
- 佐伯和子 (2018) : 地域保健福祉活動のための地域看護アセスメントガイド第2版地区活動ならびに施策化のアセスメント, 活動計画, 評価計画の立案, 医歯薬出版株式会社.
- 酒井太一, 大森純子, 高橋和子, 他 (2016) : 向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発, 日本公衆衛生雑誌, 63(11), 664-674.
- 櫻井尚子, 滝澤寛子, 渡部月子, 他 (2018) : 『地域への愛着』を測定する尺度の開発—都市郊外のグループ活動に参加している高齢者における検討—, 社会医学研究=Bulletin of social medicine: 日本社会医学会機関誌, 35(1), 83-97.
- Sarbin T. R. (1983): Place identity as a component of self: An addendum., Journal of Environmental Psychology, 3(4), 337-342.
- Scannell L., Gifford R. (2010): Defining place attachment: A tripartite organizing framework, Journal of environmental psychology, 30(1), 1-10.
- Scannell L., Gifford R. (2011): Personally Relevant Climate Change: The Role of Place Attachment and Local Versus Global Message Framing in Engagement, Environment and Behavior published online 20 October 2011, DOI: 10.1177/0013916511421196.
- Shamai S. (1991): Sense of place: An empirical measurement, Geoforum, 22(3), 347-358.
- 曾根智史, 近藤克則, 藤内修二, 他 (2016) : 平成28年度「地域保健総合推進事業」ソーシャルキピタを活用した地域保健対策の推進につ

- いて報告書～事例集及び事例から明らかに  
なったソーシャルキピタを活用した地域保健  
対策推進のため施策方向性と実践のヒント～,  
1-118.
- 園田美保 (2002): 住区への愛着に関する文献研  
究, 九州大学心理学研究, 3, 187-196.
- Stokols D & shumaker, S. A. (1981): People  
in places: A transactional view of settings,  
Cognition, social behavior, and the environment,  
441-488.
- 菅文彦, 古川拓也, 舟橋弘晃, 他 (2018): チーム,  
アイデンティフィケーションと地域愛着の因  
果関係に関する考察—FC今治の本拠地 (愛媛  
県今治市) の住民を対象として, スポーツ産  
業学研究, 28(1), 1\_1-1\_11.
- 角田英恵, 桂敏樹, 星野明子, 他 (2015): 新興  
住宅地の開発がすすむ地域における高齢者の  
心の健康に関連する要因: コミュニティ感覚,  
居住環境を含む検討, 日本農村医学会雑誌,  
64(2), 140-154.
- 鈴木春菜, 藤井聡 (2008a): 「消費行動」が「地  
域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学  
会論文集D, 64(2), 190-200.
- 鈴木春菜, 藤井聡 (2008b): 地域愛着が地域へ  
の協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木  
計画学研究, 論文集, 25, 357-362.
- 鈴木春菜, 藤井聡 (2008c): 「地域風土」への  
移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に  
関する研究, 土木学会論文集D, 64(2), 179-  
189.
- 鈴木春菜, 中井周作, 藤井聡 (2010). 買い物行  
動における「楽しさ」に影響を及ぼす要因に  
関する研究. 土木計画学研究, 論文集; 27:  
425-430.
- Swan M. A., Hobbs B. B. (2017): Concept analysis:  
Lack of anonymity, Journal of advanced nursing,  
73(5), 1075-1084.
- 高橋香子, 末永カツ子, 栗本鮎美, 他 (2010):  
住民の主体的な健康づくり活動の推進要件に  
関する検討, 東北大学医学部保健学科紀要,  
19(2), 73-80.
- 滝澤寛子, 櫻井尚子 (2018): 旧農村地域に住  
む向老期から前期高齢者の地域への愛着を測  
定する尺度の開発, 社会医学研究=Bulletin of  
social medicine: 日本社会医学会機関誌, 35(1),  
55-62.
- 谷口綾子, 今井唯, 原文宏, 他 (2012): 観光  
地における多様な主体の地域愛着の規定因に  
関する研究—ニセコ, 倶知安地域を事例とし  
て, 土木学会論文集D3 (土木計画学), 68(5),  
I\_551-I\_562.
- 地区活動のあり方とその推進体制に関する検討  
会 (2009): 平成20年度地域保健総合推進事業  
地区活動のあり方とその推進体制に関する検  
討会報告書.
- 渡辺いよ子 (2014): ボランティア, ネットワー  
クの成立, 機能要因に関する研究WHOヘルス  
プロモーションの視点から, 看護学研究紀要,  
2(1), 1-10.
- Walker L., Avant K. (2005): 中木高夫, 川崎修一  
(2008). 看護における理論構築の方法. 医学  
書院.
- Wiles J.L., Rolleston A., Pillai A., et al. (2017);  
Attachment to place in advanced age: A study  
of the LiLACS NZ cohort, Social Science &  
Medicine 185, 27-37.
- 吉村隆, 北山秋雄 (2016): 中山間地域における  
ソーシャル, キャピタルの把握量的調査方法  
の検討, 信州公衆衛生雑誌, 11(1), 13-23.